

藍織部

左京区 田中 誠孝

桃山時代の志野焼に続いて古田重然（ふるたしげなり）の好みによって造られたのが織部焼である。「織部」の名は、壮年期に従五位下織部正（織部助）の官位を叙任したことに由来している。当時の常識からはかけ離れた、従来の焼物に見るデザインとは全く異なる様相を呈し、円、三角、直線、曲線を組み合わせて描かれ、「ひょうげものなり」と云われるように形も歪んだものが多く、元禄七年（1694）刊の『古今和漢諸道具見知鈔』は織部焼の項を設け、茶入・花入・水指・鉢・皿・香合などを挙げて記述したものがあり、おそらく現在考えられている織部のおおむねの概念は、この時期にで

きあがっていたらしい。特徴は青緑色の釉薬と変形した器に自由奔放な鉄絵の文様による装飾技法が施され、中国からの華南三彩が影響していると云われている。

このよく知られている織部の文様や釉薬とは別に赤、黒、藍の三色を使用した器が昭和60年に白鷺城（姫路城）内の大名屋敷跡の発掘調査で発見された。赤、黒、藍の三色を使用した陶片は三色織部で現代の窯陶技術では（酸化還元により発色が異なるため）不可能であり陶器の歴史を塗り替えるとも言われた。そしてまた昭和60年2月から6月にかけて岡田将監屋敷跡（可児市）が発掘調査された。その出土品の中に慶長期の緑釉瓦と藍織部があり、藍織部は姫路城跡出土に次いで二度目であると奥磯栄麓は「目の眼／1986年4号」で述べており、この藍織部については陶芸家でも知る人は少ないと云われている。発掘された織部焼の陶片に藍、黒、赤の釉薬が使用されていたことで、藍の存在が判明し、大名茶陶の中で藍織部（美濃染付）が使用されてきたことが判明したのである。南蛮人染付耳付水指は周囲に南蛮人が呉須で描かれ白い半透明の釉薬がかかっている。濃淡の藍色によってポルトガル系のイエズス会の牧師や唐人服を着た子女、カルサン（南蛮型ズボン）をはいいた南蛮人も描かれ、耳は象

の鼻を模した造りになっており、隠れキリシタンの匂いがする水指である。その後の瀬戸、穴田1、2号窯の発掘調査によって桃山末、江戸初期の染付が発掘され、瀬戸でも織部染付が焼成されていたことがほぼ判明し、藍織部菊皿と白織部皿が重ねて焼かれたものが回収されていることから、藍織部（染付織部）が織部焼と同時期に焼かれていた証拠であるとされた。

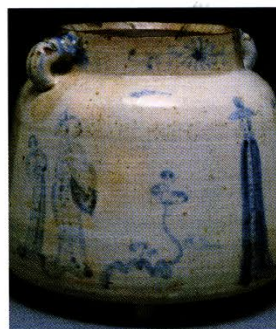
また出土の三色染付の「染付」という名称について奥磯栄麓は「藍織部とその周辺」の中で染織物の染色からきたのではないかとし、このような意味を含めて「藍」という言葉を使用したと述べている。したがって藍織部は「桃山様式的美濃焼物にコバルトを使っているもの」とされており寛永染付、美濃染付も同様の意味で使われているものと思われる。

しかし、藍織部という名は一般的に知られていないし考古学会、陶磁器学会等でも使用されている様子もなく、寛永染付、美濃染付、あるいは単に染付という表現にとどまっているようである。

奥磯栄麓は昭和48年に東洋陶磁学会美濃大会において「桃山末期から江戸初期にかけての染付を含めた焼物についての研究」という発表で大萱、大平、元屋敷



藍織部陶片



藍織部南蛮人水指

などの窯跡調査に基づき「名古屋城の御深井焼（おふけやき）や、瀬戸の染付と比較研究し、美濃は御深井焼の寛永11年に比較すると染付の発生は古く位置づけられる」と結論付けている。そして昭和60年発行の「藍織部とその周辺」では「瀬戸では栗田口で開窯した三文字屋九右衛門が桃山末から江戸初期にかけて染付をしている」と瀬戸と染付の関係を述べている。また「目の眼／1985年8号」では発掘された陶片について「志野の場合は鉄絵だけだが赤とか呉須を使うと織部の手法であって呉須がなければ鳴海織部である。織部時代の物を藍織部と云っている」としている。瀬戸では藍織部という名称にかなりの抵抗があるようである。しかし、これまでに反対する論文も見当たらず、この藍織部という名称は染織物と陶磁器を関連付けるものとして私は広く使用されてほしいと思っている。いずれにしても美濃で「染付」があったのは事実で伊万里の染付と無関係ではないと考えられている。